

試みとしての悪：車谷長吉「忌中」論

伊藤, 博

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

75

(開始ページ / Start Page)

66

(終了ページ / End Page)

75

(発行年 / Year)

2007-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010148>

試みとしての悪

—車谷長吉「忌中」論

伊藤博

はじめに

「忌中」（『文學界』平一五・五）は妻の介護疲労と経済的破綻によって、夫が後追い心中を図るまでの経緯を描いた小説である。病弱な妻を殺害した後、すぐに自殺をする事が出来ず、その夫が後追い心中を実行するために、意図的に返済不可能な高額の借金をすることによって、自分自身を死に追い込むといった行動と、その生の最終局面における人間存在の在り様が描かれている。今日、介護疲労の果ての殺人事件や無理心中事件は決して珍しい事件ではない。その意味でも、「忌中」は現在の超高齢化社会に住む私たちに様々な問題を投げ掛けている作品である。

車谷長吉は、「凡庸な私小説作家廃業宣言」（『新潮』平一七・二、以下「宣言」と略す。）を発表し、「宣言」以降は、「私

小説」を書かない旨を表明したことがあった。「宣言」を出す直接的なきっかけとなったのは、小説「刑務所の裏」（『新潮』平一四・新年号）の内容が問題となったからである。この作品では、実在する人物名が書き込まれていたために、車谷本人は、「基本的にはすべて虚構（フィクション）」（『宣言』）とはいうものの、実在の人物との軋轢が生じ、法廷にまで持ち込まれることになったのだった。おそらく、この苦い経緯を経て、車谷は、この作品の後に書いた「忌中」（『文學界』平一五・五）では、固有名を記述することにより気を配り、注意深くなっているように思われる。そこで、この作品に仕掛けられた虚構にも留意しながら、作品が提起している問題について考えてみたいと思う。

1 回避される固有名

車谷作品のひとつの大きな特徴でもあるが、リアリティを持たせるために、作者は度々、作中に実在する人物名や地名などを、その小説に書き込むといった手法を用いている。しかし、「忌中」では、具体的な固有名を作品の随所に書き込みながらも、現実との軋轢を回避しようとしたのか、きわめて巧妙に事実を覆い隠すような描き方をしている。たとえば、主人公の菅井修治が卒業したのは「亜細亜大学」であるが、昭和一年生まれの修治が大学を卒業するのは、常識的に考えれば二二歳の時である。とすれば、卒業は昭和三年ということになる。ところが、亜細亜大学が設置され、最初の学部である商学部が開設されるのは昭和三〇年である。つまり、昭和三年には、まだ卒業生を出していないことになる。つまり、修治は設置されてもいない大学に入学し、卒業したことになるわけである。これは作者の計算のうちにあつたのかどうか、不明ではあるが、大学の実名だけを借用した半端な虚構である。従つて、このような虚構は、亜細亜大学関係者がこの作品を読んだ場合に、車谷の底意地の悪さを感じ、不快な印象を持つかも知れない。同様に、妻二三子の出身高校を、豊島区に実在している豊島岡女子学園高等学校の校名に似せて、「豊島女子商業高等学校」と称し、やはり紛らわしい虚構化を図っている。

さらに言えば、修治が住む千葉県流山市東深井は現存する地域名ではあるが、番地までは書き込まずに、「運河駅」から徒

歩五分といったように曖昧に書き、また、修治の勤務する「田端信用金庫滝野川支店」は、現実に重ねてみれば、滝野川信用金庫田端支店として実在するので、実名の一部を入れ替えてしまっている。もし、仮に、現存する高校名や番地、信用金庫の名称をそのまま書き込めば、修治の行動からして、問題となる可能性がまったくないともいえないからであろう。修治が通いつめる「越ヶ谷」の「ヘルシー・ランド アクエリアス」にしても、おそらくそのモデルは、越谷ヘルシーランド・らぼーれであると思われるが、越谷という地名やヘルシーランドまではその名称を借用するものの、らぼーれの名称だけは変更している。つまり実在する固有名を使いながら、微妙なところで現実との照応を回避しているわけである。

一方、車谷自身と関係があると思われる固有名にしても、とくに問題がない場合は、改変せずにそのまま書き込んでいる。修治が「アクエリアス」で知り遇つた明美に、多額の借金までして衣服や靴などを購入させるのは、「池袋西武百貨店」であるが、この場合の百貨店の固有名の記載は特に問題とはならない。西武百貨店であれ、東武百貨店であれ、それらは一般消費者が利用する百貨店以上でも以下でもないからである。ただ、車谷が一時、西武ゼングループの代表堤清二（辻井喬）と雇用関係があつた事実を知る読者であれば、西武百貨店が書き込まれることに何らかの思いを連想することは否定できない。

他にも実際の固有名を特定することが出来る例を挙げてみよう。修治が一〇年来にわたつて、はがき将棋のやりとりを行っている仙台在住の「東北大学科学哲学科」の教員、「杉ノ森慶

一」は、哲学に多少の興味や関心がある読者であれば、『言語行為の現象学』（平五・九、勁草書房）や『物語の哲学 柳田國男と歴史の発見』（平八・七、岩波書店）等の著者である東北大学文学部教授、野家啓一を直ちに思い浮かべるであろう。あるいは、車谷のエッセイ「仙台の火消壺³」を読んでいる読者であるならば、仙台の野家啓一から車谷本人に、突然、火消壺が送られてきた事実が書かれているので、はがき将棋のやりとりまでも事実だと判断する材料はないにしても、「杉ノ森慶一」と野家啓一を重ね合わせることはなんら不自然なことではない。さらに、車谷の小説「一番寒い場所」（新潮）平一・七）の冒頭は、車谷自身が仙台の野家啓一に電話をかける一文から始まっており、車谷と野家は交友関係にあることを伺い知ることが出来る。これらは要するに、車谷は自分自身を取り巻く現実から直接に固有名を借用しながら、場合によっては、それを部分的に改作することによって、いかなれば、何らかの責任を回避する半端な虚構を作り上げているわけである。

ところで、吉本隆明は、車谷の別の作品についてはあるが、「わたしにはこの悪作の思想の表出はかなり本格的なものにおもえる。根性曲がり、ひとにたいする憎悪と怨恨の心情、病的な発作、およそ悪意を働かせずにはおられない無意識の荒廢、これらが作品の「私」をつくりあげている要素になっている」と指摘している。この指摘は、「忘中」の主人公修治にも当て嵌まるだけでなく、車谷の人間観そのものに関わる評言になっているようにも思われるが、作者車谷への言及は後に行うことにして、ここでは修治の人間観に即して検討を進めていき

たい。そのためには、次に、「ひとにたいする憎悪と怨恨の心情」や「悪意を働かせずにはおられない無意識の荒廢」がなによりゆえに主人公修治にもたらされるようになったのか、その主な原因を明らかにしておきたいと思う。

2 資本主義への怨嗟

そこで留意したいのは、修治の勤務先とその業務の内容、及び転職に関わる問題である。修治が信用金庫の貸付係長という職にあつた時、担保不足でお金を貸したのが焦げ付き、勤務先から責任を問われて処分を受け、八〇万円あまりを弁済させられている。このことが修治を金融ブローカーに転進させたきっかけとなったことは、ほぼ確実である。彼が信用金庫を辞めていなければ、そして辞めたとしても金融ブローカーとして成功していたとしたら、妻を殺害することも、自ら自殺を図ることもなかったはずである。修治が金融ブローカーへ転職する時期は昭和五九年とされており、平成二年の暮れ以降、仕事が行き詰った彼は無収入となる。我が国のバブル景気が決定的に破綻するのが平成三年の二月である。修治の生活の破綻とバブル景気の破綻は時期的にはほぼ重っている。修治の生活が、以前よりもさらに一層悪化することになるのも、現実の経済の動きと密接に連動しているわけである。

修治は住宅ローンを完済したものの、十分な貯蓄がないために、妻の介護を地道に行う経済力がなく、四〇代で膠原病を発病し、継続的な介護が必要であった妻を殺害したのであった。

彼は後追い心中をすることが出来ずに生き残ることになるのであるが、自ら死を覚悟しようとも、生きている限りは日々の生活費が必要となる。修治が妻の死を隠蔽するのは、妻の死が発覚すれば、妻の年金が支給されなくなるといった現実問題が控えているからに他ならない。下部構造としての金融経済システムの破綻が修治の妻殺害の直接的原因ではないにしても、修治をそのような立場に追い込むことになった遠因であることは間違いない。そうであればこそ、修治が金融業者から返済する意思のない多額の借金をすることが、金融資本主義への個人的怨嗟と受け取れるわけであって、かつて貸し付け業務を担当していた修治が、今度は借りる立場にいつきに反転するのも、おそらく作者の計算に入っているのであろう。修治はその生命と引き換えに現実社会への復讐を企てているのだと理解すれば分かりやすい。そのことがこの作品のひとつの主張だともいえる。しかしこの場合、復讐というのは当の本人が生きていればこそ意味があるのであって、後に検討するように、修治が自殺を図ったからといって、それが実現するわけではない。というのも金融機関は、借入者が自殺すれば、保険会社からその借用した分が保障され、かえって、本人から借金を取り立てる必要がなくなることもあって、修治の悪意や復讐が成立しなくなる可能性もなくはないからである。

ところで、修治は、時に明美と性的交渉をもつにしても、その関係のありようは明美の方が主導的であり、修治は、むしろ受動的である。修治の欲望は、「死んだように飾ってあった」靴や靴や衣服を明美が身につけ、「生き返ったように見える」

ことに満足することの方が重要なのである。性的関係を欲望することよりも、モノが「生き返る」こと。妻が「生き返る」ことが不可能であればこそ、修治は借りた多額の金銭を、現実には生きている身近な明美のために消費しているのである。いうなれば、修治は明美に「生」を擬装させ、それを確認することで、自己満足に浸っているわけである。したがって、明美は妻のありえない復活の代理表象として存在しているに過ぎないのである。しかも、そのような意味での代理表象は、約四〇年前に、妻二三子の不妊治療の帰りに見かけたスター歌手、園まりが、現在出演している「アクエリアス」での公演とも無関係ではない。現在の園まりに、修治は、「どこ廻り」であろうと何であろうと、いったん「死んだ者」が生き返って来たことに、ある救いを感じ」取っている。

語り手がいうところの、園まりの変わらぬ美貌は、二三子の腐乱が進む身体の変貌と対比させられているが、それは二三子の身体の変化を、より一層、際立たせるために、ある一定の年齢層の読者には、周知の歌手である園まりという実名を、作品内に取り込んで活用しているわけである。修治も園まりを「愛の女神」に、殺害した妻二三子を「死の女神」に喩えてみせているが、この二項対立はきわめて通俗的である。問題は、「愛の女神」に喩えられた園まりの歌手生活四〇周年を記念するリサイクル当日が土砂降りの雨で、聴きに行く予定を取り止めた修治の心理が、「客足に響くだろう、と思うと、ざまア見やがれ、とも思うた」と書き込まれていることである。この「ざまア見やがれ」という車谷特有の言葉にこそ、吉本隆明のいう車

谷作品の主人公の特質、「根性曲がり」、「悪意を働かせずにはおられない無意識の荒廃」が端的に表現されていると読むことが出来る。しかも、その一方で、修治がそのような心境を抱きながら逢いに行く明美も、その目的は、自分自身を死に追い込むための一手段にしか過ぎないのである。本来、人は生きるために金銭の都合をつけるはずが、修治は死ぬために多額の金銭を借用し、浪費している。修治の核心犯的な借金とは、その意味では、社会の倫理や規則に反しているが、作者はそれを人間の剥き出しの生だと把握し、肯定的に描いているように思われるのである。

明美との関係にしても、死の直前の逢瀬以外は、必ずしも修治にとっては性的問題が第一義的であると読むことは出来ない。作品内に散見される期日や曜日などに着目し、日を追っていけば、この作品は、妻の死体の変容していく過程と修治の生の過程が密接に関連しながらも、結果から言えば、修治の自殺にいたる過程が刻み込むように描かれているのだ。おそらく、作者はその過程を積極的に現したかったのであろう。がしかし、妻の死体が腐乱していく過程は、明らかに虚構であるにも拘らず、それがリアルに感じられ、反対に固有名をばらまいて、現実らしく見せた修治の行動が、かえって嘘のように見えてくるのは一種のアイロニーというべきであらうか。

修治は自死の直前、明美に、明美という本名ではなく、SK D時代の芸名「美佐」と呼び、「あなたの人生はあしただけじゃなくて、あさっても、その次の日もあるんだから」と語りかけている。さらに、わざわざ仙台まで会いに行った杉ノ森には、

はがき将棋の「最後の一番をかたづけたくて」とも語っている。修治は自殺の後で、関係があった人物たちに、自分のことを、せめて記憶に留めて欲しいために、それとなく、それこそ人生最後の別れの挨拶をかわしているのである。そのことは、修治の孤独を現しているであろうが、同時に彼の精神の荒廃もよく現している。

3 車谷長吉と江藤淳

車谷には、「忌中」の発表の時期と踵を接して書かれた「死」と題されたエッセイ⁵⁾がある。このエッセイは、「忌中」における後追い心中を考える上で、ある重要な材料を提供している。「死」には、車谷が慶応義塾大学在学中に江藤淳の講義を聴き、文学の基本を学んだこと。さらに後年、江藤の強い推輓によって、『鹽壺の匙』が三島由紀夫賞を受賞したことの江藤への感謝の念が述べられている。しかし、ここで重要なのは、平成一年七月に自殺した江藤淳に言及した次の箇所である。

江藤氏の死は、前年、病死なさった慶子夫人への後追い心中だった。子のない夫婦の悲劇である。どちらかが死ねば、残された方は独りぼっちになるのである。併しこれは決して他人事ではない。私のところも子のない夫婦だからである。(中略) 江藤氏のように嫁はんに先立たれた時のことを考えると、それだけで私は鳥肌が立つ。私は江藤氏のように後追い心中が出来るのか。江藤氏の死は、こういう

う問いを絶え間なく私に突きつけることになった。

ここには、江藤淳が病死した妻の後追い心中を図ったことの衝撃が車谷自身に跳ね返り、伴侶亡き後、子どものない夫の生活意識が問われているのである。そして、「私は江藤氏のように後追い心中が出来るのか」という自らに発した問いに対して、江藤淳の死後四年を経て提出した回答が、「忌中」であったと考えれば分かりやすい。

江藤淳は、六六歳の折に自殺を図っているが、「忌中」の主人公修治が自殺をするのも、作中の新聞報道の記載によれば、六六歳なのであって、明らかに作者車谷は、修治の享年を江藤淳のそれに重ね合わせている。その意味では、この作品は逆説的な意味で、江藤淳に対する鎮魂マゼランの小説であるともいえなくもない。がしかし、「江藤氏のように後追い心中が出来るのか」といった自問こそが、車谷の生の認識がきわめて狹隘であるといわざるをえないのであって、たとえ、「子のない夫婦」であっても、妻が亡くなった後で、その夫が取るべき生き方は、後追い自殺が唯一の対処の仕方ではあるまい。

車谷は、その妻高橋順子との世界一周の航海記において、「私をこの世に繋ぎ止めているものは、お袋と順子さんの慈悲だけである。この二人がいなくなったら、もうこの世にいる意味はない。存在理由はない。生きる価値はない。一切は無意味、無価値である」というように、過剰とも思える自虐的自己言及を行っている。それは、車谷が繰り返しているところの、直木賞受賞以降の強迫神経症強迫神経症に拠る言説の一種かも知れないが、ここで

は作者車谷の精神を分析することが目的ではないので、車谷の人生観や生命観の特質の一端を確認することに留めておく。

「忌中」は、車谷の人生観を反映するかのようになり、最後に修治が自殺を図り、殺害した妻の腐敗した遺体が発見されることも含めて、新聞の三面記事として報道されることがその結末となっている。今日、わたしたちは、「忌中」に類似した心中事件の報道に、しばしば接する事もあり、高齢者の心中は決して稀有な事件ではないことを知っている。そうであればこそ、春日武彦が、「忌中」に言及した論稿論稿のなかで、修治の自殺を報じた作品内の新聞記事（作品中には「平成一五年五月二七日火曜日朝日新聞夕刊」と明記されている。）に関して、次のように述べているのも、現在の我が国の超高齢化社会の現実を反映した素朴な反応といえるだろう。

この記事は本物だろうと思った（実は五割くらいの確率で）。それに朝日新聞に載っていたと明記し、ついでに毎日にも讀賣にも同様の記事が載っていたと記している。さすがに嘘だったら具体的に新聞の名前までは書くまいと推測したのである。しかし一応好奇心から縮刷版を調べてみたら、こんな記事は載っていなかった。日にちがずれていたら、こんな記事は載ってなさそうであった。

先に、車谷の半端な虚構フィクションについては、車谷の底意地の悪さを指摘しておいたが、この「朝日新聞」の場合も同様である。もちろん、実際に朝日新聞は存在するが、件の期日の朝日新聞夕

刊には、作品に描かれたような事件の報道を見ることは出来ない。念のため、菅井夫婦が住む流山市を含む千葉県全域において流通している最も有力な地方新聞、千葉日報や朝日新聞千葉版も調べたが、この作品に直接関連するような事件は報道されてはいない。明らかに、読者に事件を信用させるために、実名を借りた紛らわしい虚構であるといつてよい。

もっとも、この場合、実際の新聞記事内容を探索することよりも、重要なのは、菅井の妻二三子が二ヶ月半前に自殺していたという作品内の「朝日新聞」の記事内容であるだろう。夫修治による妻二三子の絞殺と死体遺棄は、時間の経過による死体の腐乱状態から、警察は絞殺とは断定できずに自殺と見做し、死体遺棄事件として調べているというのが記事の内容であるが、春日武彦はこの点を見落としている。つまり、修治は死してなお、妻二三子の殺害をも隠蔽することに成功したといわざるをえないのであって、ここに修治の無意識の悪意を読み取ってもよいわけである。

がしかし、近年、このような悪意を打ち消すかのような心中事件が現実が発生している。平成一七年一月、福井県大野市で、老いた夫が妻の介護疲労の果てに、かなりの遺産を市に寄付する旨の手紙を残して、自ら旧火葬場に入り、点火して妻と心中を図った事件がそれである。この死後も他人に迷惑が懸かれないように、十二分に配慮された心中事件と、「忌中」の自らの死体の処分を他人に依頼し、借金を踏み倒し、妻の殺害を自殺と思わせるほどに悪意が貫かれた修治の行動とでは鮮やかな対比を見せている。ふたつの家庭の家産の相違はともかく、

虚構として描かれた事件と実際の事件はレベルが異なり、同一に取り扱う事は出来ないが、「忌中」には、現実の心中事件を打ち負かすようなリアリティはない。

4 静寂さと不気味さ

ここでは、「忌中」において、修治が試みた後追い心中の性格をより明らかにするために、心中を主題にしたいくつかの作品を取り上げ、それらに言及しながら、さらに検討を進めて行きたいと思う。たとえば、川端康成には、夫婦とその娘の死を幻想的に描いた掌小説「心中」(『文藝春秋』六一・四)があり、大岡昇平には妻子と夫ある男女がそれぞれの家意識から脱却し、成立しえない愛の解決策として、心中を図る「来宮心中」(『文學界』昭二五・五)がある。あるいは、夫の存在ゆえに、想いを寄せる義姉の長男との恋愛が成就出来ないために、その妻が手首を切って自殺を図り、宿泊した温泉旅館の下男が、なぜかその後を追うかのように自殺を図る田宮虎彦の「銀心中」(『小説公園』昭二七・二)もある。

しかし、「忌中」との関連からいえば、車谷長吉自らが撰定した短編小説集『文士の意地 下』(平一七・八、作品社)の最初に配置されている永井龍男の「青梅雨」(『新潮』昭四〇・九)に言及しなければなるまい。「青梅雨」は老夫婦とその養女、さらに、妻の姉の一家四人の心中事件の三面記事を作品の冒頭にかけており、「忌中」とはまったく逆の作品構成となっている。養女はあるもの、実子はなく、妻は心臓の持病の

ために病弱であり、夫は事業に失敗し、経済的に破綻した家族の心中前夜が描かれた作品である。夫の後追い心中と一家四人の心中といった状況の差異はあるものの、作品の主題と構成からいっても、「忌中」は、「青梅雨」から相当強い影響を受けた作品であるといつてよいだろう。車谷が「忌中」を書くにあたって、この「青梅雨」が念頭になかったとは思えない。

たとえば、「宣言」発表以後、まもなくして、車谷は玄侑宗久との対談「文学で人は救われるのか」(『文學界』平一七・四月号)で、玄侑宗久から「車谷さんが私小説を辞めたあと、どんなものを書かれるのが、すごく楽しみなんですよ」と言われ、車谷はそれに対して、「これからは、一つは新聞ダネ小説をやりたいんです。(中略)小さな事件でも、実に不気味だなと思うのがありますね。そういうのを五年なり十年経ってから書く。三島由紀夫や永井龍男が得意でしたね」と答え、三島由紀夫の「金閣寺」や永井龍男の「青梅雨」を「新聞ダネ小説」の例に挙げています。さらに車谷は、「人間が人間であることの不気味さをテーマに書きたいわけです」とも語っていた。「忌中」の発表は、この対談以前であるが、おそらく車谷は、自身自身の創作にとって、永井龍男の「青梅雨」などは、かねてより参考とすべき作品のひとつであると考えていたのであろう。その「青梅雨」では、心中前夜の一家の様子が淡々と描かれており、屋外に降る小糠雨と「弱い夜風」とも相まって、屋内では死に向かう一家の静かなひと時の風景が描き出されていた。「青梅雨」は「忌中」と異なり、死を覚悟した人たちであるにも拘わらず、自虐的な会話もなければ、世間を恨む発言もない。

描かれているのは、死に向かう感情が露呈することを、各自が極力抑制し、お互いを気遣う自然な優しさである。さらに、この一家心中は、死後、他人に迷惑が及ぶことを極力避けるために、自分たち自身の葬式費用や戸籍書類、遺体の後始末を頼む依頼状まできちんと枕もとに用意し、用意周到に準備された後で、実行に移されている。つまり、彼らは経済的には破綻はしていたが、精神的には決して衰弱も荒唐もしていたわけではなかったわけである。静寂な雰囲気すら感じ取る事が出来る作品である。「忌中」が意図的な悪の側から「人間が人間であることの不気味さ」を描こうとした作品であるのに対して、「青梅雨」に描かれた世界は善の側からやはり、「人間が人間であることの不気味さ」を表現した作品であるといえなくもない。

ところで、「忌中」の最後では、修治が意識的な悪の実践を経て、彼自身が自宅玄関のガラス戸に、忌中と書いた便箋を貼り付け、その後、すぐに自殺を図るといった人生最後のパフォーマンスが描かれているが、車谷は、このパフォーマンスにも「人間が人間であることの不気味さ」を表現したかったのかも知れない。がしかし、このパフォーマンスは、修治の徹底的に利己的な思考と行動が行き着いた果ての単なる自己放棄ともいえる行為であるために、その死に何らかの積極的な意義を見出すことは出来ない。その意味では、この「忌中」は、修治の「人間であることの不気味さ」ではなく、むしろ無意味さを現わす作品になってしまったのではあるまいか。要するに、「新聞ダネ小説」に見せかけた「忌中」は、先に引用した実際の老夫婦の心中事件を報道した新聞記事からの感動には勝てなかったとい

うわけである。言い換えれば、車谷長吉の半端な虚構は、それゆえに現実の方から仕返しを受けてしまい、車谷が修治に託した悪の実践は不毛に終わったのである。

〔注〕

(1) 川崎賢子は、「齋藤慎爾」「深夜叢書社」モデル名譽毀損裁判のその後(『私小説研究』第7号、平一八・三、法政大学私小説研究会)で、車谷の「刑務所の裏」というテクストによって生じた実名小説問題について言及し、「刑務所の裏」を改稿した「密告」がモデル小説に改変された経緯について触れながら、その改変が根本的な改変とはなっていないことを指摘している。

(2) 車谷と西武流通グループ(現、西武セゾングループ)との一時的雇用関係については、車谷自身が繰り返し発言しているが、取り敢えず、近年の発言として、高橋源一郎と山田詠美との鼎談「微妙に往生際悪いですね」(『群像』平一七・二二月号)を参照。

(3) 『業柱抱き』所収(平一〇・四、新潮社)

(4) 「私小説は悪に耐えるか」(『現在はどこにあるか』所収(平六・一二、新潮社)(『鹽壺の匙』平七・一一、新潮文庫に再録)

(5) 『雲雀の巢を捜した日』所収(平一七・一一、講談社)

(6) 車谷長吉は、「武蔵丸」(『新潮』平一一・七月号)においても、「私達は子のない夫婦の悲劇は、平成十一年七月二十一日夜に自殺した江藤淳の死で思い知らされた。江藤淳は九ヶ月前に、妻・江頭慶子さんに先立たれ、妻恋い自殺をしたの

だった」というように言及している。なお、車谷は江藤淳が自殺する前年に対談を行っている(『私小説に骨を埋める』「文学界」平一〇・三月号)。その対談で車谷は、「赤目四十八瀧心中未遂」(平一〇・一、文藝春秋)に触れ、「タイトルのとおり、『赤目四十八瀧心中未遂』はぎりぎりのところまでいきませんが、心中はしません。追いつめられながらも、女は娼婦に身を落とせば、まだそこに居場所があるんです。九分九厘は成功しなくても、可能性は残しておきたかった」と江藤に語っている。ならば、後追い心中をテーマとする「忌中」は、生の可能性よりも生の不可能性を描いた作品であるといえるであろう。

(7) 『世界一周恐怖航海記』(平一八・七、文藝春秋)における一月一四日(土)の記述を参照。

(8) 「死の安らぎ」(『日本経済新聞』平成一七年七月三十一日)(『雲雀の巢を捜した日』所収、平一七・一一、講談社)に「十年前の五十歳になった時、いきなり颯風が吹いて、私は強迫神経症に取り憑かれ、幻視、幻聴、幻覚に襲われた」との記述がある。

(9) 「無意味なものど無気味なもの 第十回」(『文学界』平一八・七月号)は「忌中」論として読むことが出来るが、春日武彦は、「性格の悪さと愚直さとの境目が判然としないうところに車谷の持ち味があったのではなかったか」と一定の評価を下している。

(10) 平成一七年一月九日(水)毎日新聞夕刊に、「旧火葬場に焼死体 焼却炉内 老夫婦、自殺か」を見出しとして、福井

県大野市七坂の旧火葬場の焼却炉内で7日、白骨化した2人の焼死体が見つかり、「県警大野署の調べで、歯の治療痕などから1人は近くに住む無職の男性(80)と断定。もう1人は行方不明になっている男性の妻(82)とみて身元の確認を急いでいるが、同署は状況から自殺とみている。」「男性は妻と2人暮らし。子どもはおらず、妻が数年前から糖尿病を患い足が不自由だが、男性が一人で介護を続けていた。」との記事が掲載されている。

〔附記〕

本稿は、平成一八年度法政大学国文学会(七月一日、於法政大学ポアンナードタワー・スカイホール)における口頭発表の内容に加筆訂正したものです。執筆に際して、勝又浩教授から本稿の細部にわたり教示を得ました。ここに記して御礼申し上げます。

(いとう ひろし・修士課程二年)